

長谷川路可・新出のフレスコ画（富嶽図）と その修理復元について

About a fresco (mt. Fuji figure) of Roka Hasegawa, the new appearance
and the repair reconstruction

有田 巧
Takumi ARITA

フレスコ画家／崇城大学芸術学部名誉教授

キーワード：長谷川路可・フレスコ画・富嶽図・ストラッポ

A mural depicting Mt. Fuji by Roka Hasegawa (1897–1967) was removed from the wall of the building in 1960 and stored for 25 years. This report is a record of the repair and restoration of the removed mural.

はじめに

長谷川路可（1897～1967）は、1897年（明治30年）東京に生まれる。本名龍三。1914年暁星学園にて受洗、洗礼名ルカ。1916年東京美術学校日本画科へ入学し、松岡映丘に師事する。1921年卒業。同年フランスに留学する。パリでシャルル・ゲラン（1875～1939）に師事し、洋画を学ぶ。サロン・ドートンヌ展などに入選し、後に会員に推挙される。ギメ美術館、ルーブル美術館、大英博物館、ヘルケルクンデ美術館に所蔵されている敦煌西域壁画を二年半かけて、七十数枚模写する。1925年フォンテーヌブロー美術学校において、ポール・アルヴェール・ボードワン（1844～1931）、カルロ・ザノンにフレスコ画を

学ぶ。1927年帰国。1928年日本で最初のフレスコ壁画を東京カトリック喜多見教会に制作する。1939年日本大学芸術学部において、日本画とフレスコ画を担当し教える。1941年日本大学芸術学部の学生と日本フレスコ壁画協会を結成し、活動する。路可の戦前までのフレスコ画作品の多くは建物と共に消滅しており、初期の作品がわずかに残っているのみである^(注1)。1951年イタリア・チヴィタヴェッキアの日本聖殉教者教会に日本二十六聖人壁画制作着手。1954年完成し、祝別式が行われる。1955年ヴァチカン美術館所蔵のポンペイなどの発掘壁画を模写する。1957年帰国し、武蔵野美術学校に勤務する。1960年武蔵野美術大学のフレスコ研究会の学生達と壁画集団（F・M）を結成する。早稲田大学文

学部エレベーターホールに床モザイクを制作する。東京国立競技場メインスタンドに壁モザイク制作、長崎の日本二十六聖人記念館にフレスコ壁画制作など日本各地の建造物にF・M会員と共にフレスコ、モザイクを制作する。1967年ローマ法王の招聘を受け渡伊。法王謁見の二日後に発病し、滞在先のローマで客死。享年69歳。1968年イスラエル、ナザレ市の聖告知教会に路可が描いた下絵をもとに、F・M会員によって「華の聖母子」(モザイク)が完成された。

フレスコ画で描かれた新出の富嶽図

この新出のフレスコ画は、渋谷区千駄ヶ谷4丁目にあった修学旅行団体宿舎の修養団・東京青年文化会館1階ロビーに、路可が1960年4月に描いたものである。修養団発行の「向上」誌昭和35年5月号に会館完成の竣工式前日4月9日に現地取材した記者の『いよいよ竣工した晴れの修養団青年文化会館よく見て歩く記』という記事がある。《一前略一館内に一步入って先ず目に止まったのはホール右壁高く描かれている一大壁画である。大雲海からぬつと霊峰の突き出している富士山。金色のさんぜんたる太陽が雲海をつらぬいて昇りかけている雄大な構図である。長谷川先生が文化会館竣工祝われて御寄付くださったのです。本当に感謝しています。長谷川路可先生は、人も知るローマ*のサンマルテリ・ジャボネーゼ教会に、二十六聖像を描かれた世界的な画伯だ。「この画のモチーフはたくましい青年の力を描こうとしたも

のです。」長谷川先生からうかがっていたが、まさに青年の気力を象徴する一大傑作「後略」¹⁾とある。

路可の手帖／1960年4月の頁

4日(月)午後1時、修養団に行って、ムサシノに石灰を取りに行く事^(注2)。

5日(火)修養団の壁画製作。(伊藤君と共に)

10日(日)修養団、開館式、午前10時、出席の事。

と小さな文字の書き込みがある。150号M(145.5cm×227.2cm)よりひと回り大きな面積を、助手の伊藤氏^(注3)と描いた。手帖の6日から10日までのスケジュールは埋まっており、4月5日の1日で描いたと思われる。この作品の前の路可を写した写真のコピーがある(図1)。路可の胸に花のような形したりボンが見えるので、竣工式当日写したものと思われる。作品下辺下に「旭日富嶽図」と読める画題が貼っており、左辺横には6行縦書きの文章が貼ってあるが読めない。おそらく竣工式の日のために作品の説明を墨書きしたと思われる。



図1 富嶽図の前に立つ路可
1960年4月10日

昭和30年代後半に作った会館のパンフレットにもほぼ同じような写真が載っている（図2）。

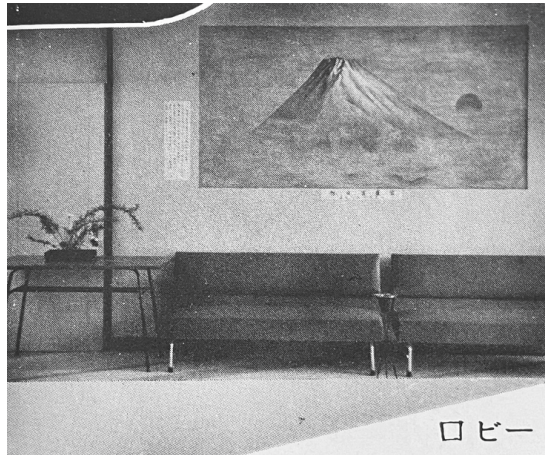


図2 東京青年文化会館パンフレット（部分）昭和35年頃

二つの画題「旭日富嶽図／希望の富士」について

竣工式当日に写したと思われる写真には「旭日富嶽図」とあるが、後年、東京青年文化会館が作った絵葉書（図3）には、『「希望の富士」フレスコ壁画の大家 長谷川路可画伯筆 昭和35年4月10日 東京青年文化会館竣工にあたり先生が朝日にかがやく霊峰にこれからの若人たちにたく

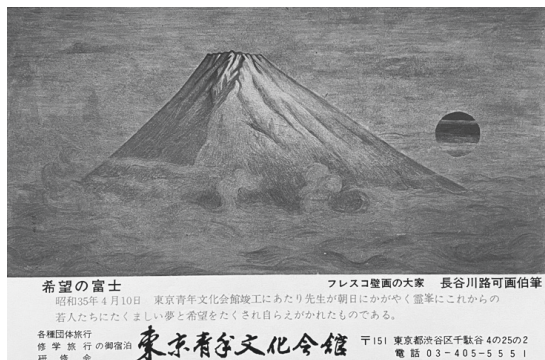


図3 東京青年文化会館の絵葉書

ましい夢と希望をたくされ自らえがかれたものである。』とある。

路可は1921年フランス（パリ）に留学中、「一前略一駐仏日本大使館でパーティーが催され、私はその席によばれて、来客の前で席画をすることになりました。石井大使（後の外務大臣）の志で、主賓の客にみやげとして色紙をかくようにとのことでした。一中略一老将軍に、私は雲海の表に登る朝日と富士をかきました。将軍は黙々として終始熱心に色紙を凝視していましたが、「まるであなたのお国、日本を象徴するようではありませんか一後略一」（注4）と回想している。150号M（145.5cm×227.2cm）を超えるフレスコ画と色紙では簡単には比較できないが、雲海から突き出た富士山の背景から昇る朝日は、日本を表現する路可得意のテーマだったのだろう。

絵葉書にある住所の郵便番号は1968年に導入された制度であり、少なくとも1968年以降、画題は「希望の富士」になったと推測される。

作品のストラッポ（画面表層剥離）

その後、1994年老朽化のため東京青年文化会館を取り壊し、新しいビルが建設されるにあたり、作品を1階ロビーの壁からストラッポ（剥離）することになった。そのため、寒冷紗をおよそ30～40cm角に切ったものを二重にして画面全体に膠で貼り付けた後（図4）、作品保存のため路可の弟子たちによって1994年5月7日建物の壁から寒冷紗ごと剥ぎ取りストラッポされた。剥離作業前に撮影された朝日の部分



図4 ストラップのための寒冷紗貼り

写真を見るとカルトネ（原寸大下絵）に空けられた間隔の広いスポルヴェロ^(注5)の穴から転写された点の跡がうっすら確認できた。

当日のストラップの様子が、その時の作業メモに残されている。《友山、原田、星 五月晴れの日なり ・壁厚1m/m～3m/m 一回塗り ・下地セメント壁とフレスコ壁の接着ははなはだしくストラップは困難を極めた。10：00～4：00 ほとんどハツリ、ハンマー等で壁とコンクリート壁よりはつる作業に終止する。星先生の助っ人は非常にありがたかった》。友山氏と原田氏はF・M会員である。剥がされた作品は、画面に寒冷紗を膠で接着したままの状態丸められ、ビニールに包まれて、路可遺族宅に25年間今日まで保管されていた。

「旭日富嶽図／希望の富士」の修理復元

25年間路可の遺族宅に保管され、眠っていた「旭日富嶽図／希望の富士」を路可が子供時代を過ごし、留学後アトリエを構えた鶴沼（藤沢市）で展示しようと鶴沼郷土資料展示室運営委員会の方々や路可の作品を管理する遺族でつくる長谷川路可記念会からの要望があり、修理復元することになった。

保管されていた作品の損傷は大きく、調査のために部屋で広げると漆喰の砂が落ちるなどして取り扱いには慎重を期した。画面を壁から剥がすため、寒冷紗を貼る過程で塗布した膠水が漆喰壁に深く染み込み、フレスコ画面表層のみ剥離すべきところ、スムーズに剥離できず漆喰壁も一緒に剥がされたと考えられる。そのため剥離した作品の裏面には膠で固まり硬化した漆喰が1～5mm厚さでほぼ全面に付着していた。漆喰の重さで画面も変形し、柔軟性がないため、画面の折れも多く見られた。画面は1cm～14cmの破れや、1～5平方cmの穴も多々あり欠損箇所も30箇所ほど確認さ



図5 ストラップ後の作品保管状態

れた。25年間の保管中も作品移動があったらしく、負担が重なり、損傷が進んだと考えられる（図5）。

作品の搬入は事前調査の後、後日、厚紙の筒にエアークラップを巻いて芯を作り、その芯に作品巻いて輸送した。作品が保管されていた部屋の机には路可の遺影と十字架、マリア像などと共に、親交のあったイタリアの彫刻家ファッツィーニから1972年に贈られたブロンズ像が横たわっていた。プレートには「我友 長谷川路可へみまかりののちも私の愛と尊敬のすべてをこめて ペリクレ・ファッツィーニ」とあった。

修理復元作業は、青梅市にある青梅織物工業共同組合の旧織物加工工場を1カ月間借り、画面裏に付着した漆喰下地の除去、破れ・破損部修正、麻布に接着、画面剥離の寒冷紗と膠除去までをおこない、補彩は同じ青梅市内にある絵画保存修復工房「雙安居」に移し、続けた。

以下は修理復元作業記録である。

修理復元前画面寸法

左辺 1335 × 中央 1330 × 右辺 1330mm

上辺 2560 × 中央 2560 × 下辺 2550mm

厚さ 1～5mm

この寸法はストラップ時の寒冷紗が貼られた状態のままのおおよその外寸

修理復元後寸法

左辺 1195 × 中央 1195 × 右辺 1195mm

上辺 2420 × 中央 2420 × 下辺 2420mm

厚さ 28mm

M150号大 変形

修理復元場所：修理復元作業期間

青梅織物工業協同組合 旧織物加工工場
内サイジング工場

2019年7月10日～8月7日

絵画保存修復工房 雙安居

2019年8月7日～2020年2月3日

修理復元処置

1. 修理復元前の状態調査、写真記録

作品の事前調査と打ち合わせを行い、修理復元計画をたてた後、作業場に搬入した。

修理復元前写真撮影。作品を裏から透過光で見ると漆喰固着の有る無しがよく観察できた（図6、7）。

2. 表側からの欠損部と亀裂部の固着強化、画面養生

表側の寒冷紗の上から、欠損を含む破れ箇所にはかけはぎをし、亀裂部には膠

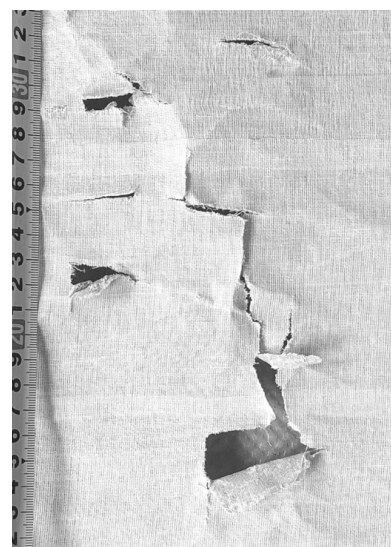


図6 作品の損傷（部分）

水を差して補強した。大きな欠損を含む破れ箇所は大小30ほどあった。

3. 表側から変形修正

表側の寒冷紗の上から、折れ、破れ等による画面の厳しい変形箇所に電気コテで加温加圧後、砂袋を乗せて圧着し、この作業を繰り返して変形修正した。裏面に漆喰が付着している部分としてない部分の厚みの差のため、砂袋の重みが平均にかからず難航した。

4. 裏面の漆喰除去

電動サンダーとヤスリで裏面の漆喰を防塵マスクと防塵メガネを着用して注意深く除去した（図8、9）。

漆喰に使用した砂がやや荒めで固着力も強く、サンダーの歯は10数枚が摩滅し、歯の形状や材質を変えながら9日間除去作業を続けた。

漆喰を削る過程で薄くなった裏面側から、わずかに富士山や朝日のシルエット

が透けて見えるようになった（図10）。裏から厚い漆喰壁を削り、表面の結晶皮膜（カルサイト）越しに裏側から富士山や朝日を見るのは不思議な体験であった。そして表面の薄い結晶皮膜は柔軟性があった。

削った漆喰の重量はおよそ9.5kg余りだった。



図8 ストラップ時に固着した漆喰



図7 裏からの透過光写真



図9 電動サンダーで裏面の漆喰除去中

5. 裏面側から再度固着強化と変形修正

漆喰を除去した裏面側から、再度、より細やかに欠損を含む破れ箇所にはけはぎをし、膠水を差し、電気コテで加圧加温を行い、砂袋を乗せてより平になるようプレスを繰り返した（図11）。

6. 新調パネルに麻布キャンバスを張り込み基底材を準備

パネルはシナ合板4mm厚を28mm厚のパネルに両面太鼓張りにしたものを特

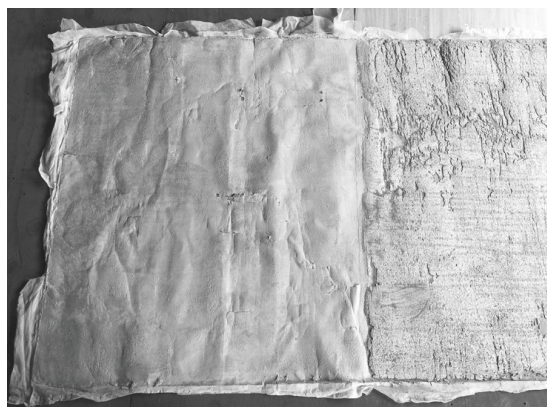


図10 漆喰除去後、裏面から朝日が透けて見える



図11 変形修正

注した。

新調したパネルに、市販の麻布キャンバスの裏面を表側にして、タッカーで袋張に張り込んだ。

7. 表打ち寒冷紗欠損部の目止め

表打ち寒冷紗の穴や裂け目から接着剤が表側にはみ出ないように、表側に防水性の養生テープを貼った。

8. 画面を新調パネルに接着

水性エマルジョン・寒水石1厘少々・消石灰少々・顔料少量（イエローオーカー、ピーチブラック）を混ぜた接着剤を調合し、寒冷紗付きの画面を、パネルに張り込んだ麻布に接着した（図12）。

9. 乾燥

接着剤を完全に乾燥させた。

10. 表面の目止め養生テープ除去を全て除去した。

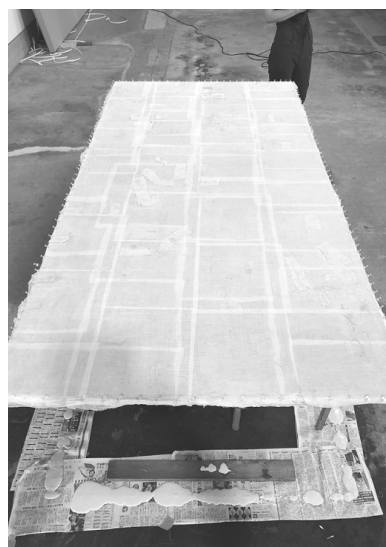


図12 パネルに張った麻布に接着

11. 表打ち寒冷紗除去

25年前、壁から剥がし取られる時に貼られた表打ち寒冷紗と画面上の膠を、お湯で膨潤させながら慎重に除去した(図13)。

この時初めてオリジナルの本画が現れた。画面の左下に黒褐色絵具で縦書きのサイン「路可筆」が確認された。

12. 画面に残った寒冷紗の糸を除去 ピンセットで一本一本引き抜いた。



図13 ストラップ時の表打ち除去



図14 補彩

13. 補彩

ごく薄い膠で練った日本画顔彩で、フレスコ画の欠損箇所に周囲の調和するよう色彩を補った(図14)。朝日の周りや富士山山頂に塗られたやや厚めの金泥は残っていたが、作品下部の雲に薄くのせたと思われる金泥は残っておらず、イエローオーカーと褐色系の濃淡で描かれていた。ストラップ前に写された写真コピーや絵葉書を見ても金泥の濃淡を正確に確認できないため、雲の形を含め補彩は最小限にとどめた。この補彩は水で除去が可能。

14. 新調額縁取り付け

額縁を特注し、作品を額装して、吊り下げ金具を取り付けた。

15. 報告書作成

16. 2020年3月22日 作品搬出

路可の展覧会開催にあたり、藤沢市の鶴沼郷土資料展示室に運搬し設置する(図15・修復後)。

「長谷川路可 鶴沼ゆかりの世界的芸術家」展 2020年4月1日～12月25日
修復なったフレスコ画「旭日富嶽図」／



図15 修復後

希望の富士」と共に多くの文献や写真資料が展示された。

《修理復元担当 原田恭子・有田貴美・有田巧》

長谷川路可「旭日富嶽図／希望の富士」フレスコ画の技法

この作品をストラップしたF・M会員のメモによると、下地漆喰壁は1～3m/mで薄く1回塗りでジョルナータの分割跡はなかった。150号M（145,5cm×227,2cm）よりひと回り大きな壁面を1日で仕上げる計画のためか、構図はシンプルである。富士山と朝日、そして、湧き上がる雲の中から姿を見せている冠雪の富士。漆喰壁の乾燥に追われながら描くフレスコ画技法は長時間は描画できない。

富士山の描写は、茶褐色の顔料で富士の稜線に沿って太い筆で筆跡を見せて描き、立体感を出している。湧き上がる雲は富士と違ってうねるような曲線の濃淡であらわし、漆喰壁（下地）の白色を活かした表現になっている。最後に画面にのせた金泥は、厚く塗っている部分は残っているが、画面下のうねる雲の上に薄くのせたと思われる金泥は残っていない。フレスコ画は顔料を溶く時に接着剤を使わず水だけで溶いて描く技法である。水で練った消石灰が乾燥する過程で二酸化炭素と結びついて、結晶皮膜（カルサイト）をつくり、画面に塗られた顔料を包み込んで壁面に定着する。

戦前の記録だが、路可はかなり長時間制作している。昭和14年に藤山工業図書館に制作した大きなフレスコ画『科学と芸

術』『啓示と創造』の記録がある。それを読むと、下塗り（リンザッフォ）漆喰が昭和13年12月末に塗られ、充分乾燥させ、翌年2月24日中塗り（アリッチョ）厚み1.5cmを塗っている。午前10時に塗られた漆喰は6時間後の午後4時には水分は適当に下塗りの壁に吸われたとある。そして直後、描画面である上塗り（イントナコ）高さ四尺五寸、横六尺五寸（約1m36cm×1m97cm）を塗っている。そして16時間経過した翌日午前9時から描き始めて15、16時間から20時間位の間が最も調子が良く、30時間後も吸い込みがあり描画できたと書いている。

「―前略―一枚の画面を仕上げるには、壁面の関係上仲々のスピードを要する。―中略―三月一六日午後六時頃壁面が整ひ翌十七日午前十時にデッサンを移し取り、午後になって着彩、十九日の午後二時頃完成したものであった。高さ六尺の横十五尺の画面に人物三人がポーズしてゐる構図であった―後略―^{（注6）}」。『科学と芸術』『啓示と創造』の制作についての記述だが、建物は戦後、生命保険会社に売却されたのち取り壊された。

戦前より建築物に大きな作品を多く手がけた路可のフレスコ画技法は、東京美術学校で松岡映丘に学んだ線描や薄く絵具を重ねる日本画表現が下地にあると思われる。それぞれ薄く塗った固有色の上に、明暗や量感を表現する路可の大胆なハッチングは、距離を置いて見る大きな壁画ではこの線描の硬さは弱まり、周りの色と馴染み溶け込んでいる。この富嶽図の線描は線の太さの違いはあるが、イタリア・チビタ

ヴェッキアの日本聖殉教者教会に制作したフレスコ壁画と共通してしている（図16）。

ヨーロッパの美術館博物館に所蔵されている敦煌西域壁画や、エトルクス発掘壁画やポンペイで発掘されたフレスコ画など数多く模写した経験の中で路可が見出した描画表現だった。残された路可の作品を見ると、キャンバスに直接漆喰を塗って描いた作品やストラッポに失敗した作品もある。作品を壁から剥がす壁画の保存修復技術をローマで学び、フレスコ画による絵画表現の可能性を求め、試行錯誤しながら制作した路可の苦労の跡が残された作品の随所に見える。

雑誌の対談で「―前略― 創作をフレスコでやり、それをキャンバスに張りつけて油絵と同じような方法で陳列すれば、これは一つの技巧が入るんです。―中略― 建築の一部を装飾して、はじめて壁画の本質がある。けれどもそういうことができればまた壁画というものに関心をもたせることができるし、また壁画風のものを小さい



図16 チビタヴェッキアの日本聖殉教者教会（部分）

画面にこしらえて、パネルとして部屋の一部に飾ることもできるんですよ^(注7)。」と語っている。

新聞にも「―前略― 壁画は執筆された場所においてのみ見るのが通例だったが、古代壁画がそのゆるみとともにこわれてゆくのを完全に保存するため、あるいは壁画自体を任意の場所に持運ぶ手段として、近年ストラッポという壁画をはぎ取る方法がイタリアでは熱心に研究されていた。これを知ることは新しい技法を壁画法とともに日本の画壇に示すことになるので、とうとう今日までがんばりつづけてこの珍しい技術も自分のものとして帰って来たのである。―後略―^(注8)」と書いている。しかし、作家自身の創作活動とは別にして、現在では歴史ある古い壁画の修復において、描かれている壁から剥がすストラッポによる保存方法は慎重になっている。

「旭日富嶽図／希望の富士」を藤沢市に寄贈

路可の作品を管理する遺族の長谷川路可記念会の熱意で藤沢市に寄贈が決まり、2021年4月8日、本庁舎6階応接室で贈呈式が行われた。

出席は、鈴木恒夫市長、宮治正志副市長、長谷川路夫氏（長谷川路可記念会）、中島知子氏（鶴沼郷土資料展示室運営委員会委員長）、内藤喜嗣氏（鶴沼郷土資料展示室運営委員会副委員長）、原田恭子氏（画家・武蔵野美術大学で路可に師事）、有田巧（画家）。

「旭日富嶽図／希望の富士」は、この日より本庁舎1階に展示された。

謝辞

今回この小稿を書くにあたり多くの方々にお世話になりました。長谷川路可記念会の皆様、鶴沼郷土資料展示室運営委員会の皆様、青梅織物工業共同組合、多くの助言を頂いたF・M会員の宮内淳吉氏と原田恭子氏、そして画家の大山富夫氏（写真撮影）に御礼申し上げます。

〔註〕

- （注1）拙稿「長谷川路可のフレスコ画（1）」
會津八一記念博物館研究紀要 第4号
2003年3月25日発行
- （注2）ムサシノ（武蔵野美術学校）
- （注3）伊藤禎朗 1942年日本大学芸術学部
卒 日比谷図書館、山梨県庁などに壁
画制作
- （注4）「思い出の人々」文化服装学院「すみ
れ」第12号 昭和37年3月
- （注5）カルトーネに点線状に穴をあけ、穴か
ら顔料をすり込み、壁に下絵を転写す
る方法
- （注6）「フレスコ壁画の実験に就て」『アトリ
エ』昭和14年5月号
- （注7）「対談；壁画 宗教芸術 フレスコの
歴史と技術」長谷川路可 宮本三郎
『美術手帖』1957年11月
- （注8）「壁に向かって六年」朝日新聞 昭和
32年9月15日

*正しくはチヴィタヴェッキア

□頭発表

有田巧「長谷川路可・新出のフレスコ画（富嶽図）とその修復について」2021年度 明治美術学会研究会 12月18日 早稲田大学文学
学術院36号館681教室

